
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例）鍋《なべ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）三|切《きれ》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数）

（例） [# 「月+罌」、第3水準1-90-51]

鍋《なべ》はぐつぐつ煮える。

牛肉の紅《くれない》は男のすばしこい箸《はし》で反《かえ》される。白くなった方が上になる。

斜に薄く切られた、ざくと云う名の葱《ねぎ》は、白い処が段々に黄いろくなって、褐色の汁の中へ沈む。

箸のすばしこい男は、三十前後であろう。晴着らしい印半纏《しるしばんてん》を着ている。傍《そば》に折
靴《おりかばん》が置いてある。

酒を飲んで肉を反す。肉を反しては酒を飲む。

酒を注いで遣《や》る女がある。

男と同年位であろう。黒縹子《くろじゅす》の半衿《はんえり》の掛かった、縞《しま》の綿入に、余所行《よそゆき》の前掛をしている。

女の目は断えず男の顔に注がれている。永遠に渴しているような目である。

目の渴《かわき》は口の渴を忘れさせる。女は酒を飲まないのである。

箸のすばしこい男は、二三度反した肉の一切れを口に入れた。

丈夫な白い歯で旨《うま》そうに嚙《か》んだ。

永遠に渴している目は動く [# 「月+罌」、第3水準1-90-51] 《あご》に注がれている。

しかしこの [# 「月+罌」、第3水準1-90-51] に注がれているのは、この二つの目ばかりではない。目が今
二つある。

今二つの目の主《ぬし》は七つか八つ位の娘である。無理に上げたようなお煙草《たばこぼん》盆に、小さい
花簪《はなかんざし》を挿している。

白い手拭《てぬぐい》を畳んで膝《ひざ》の上に置いて、割箸を割って、手に持って待っているのである。

男が肉を三|切《きれ》四切食った頃に、娘が箸を持った手を伸べて、一切れの肉を挟もうとした。男に遠慮
がないのではない。そんならと云って男を憚《はばか》るとも見えない。

「待ちねえ。そりゃあまだ煮えていねえ。」

娘はおとなしく箸を持った手を引っ込めて、待っている。

永遠に渴している目には、娘の箸の空《むな》しく進んで空しく退いたのを見る程の余裕がない。

暫《しばら》くすると、男の箸は一切れの肉を自分の口に運んだ。それはさっき娘の箸の挟もうとした肉であ
った。

娘の目はまた男の顔に注がれた。その目の中には怨も怒もない。ただ驚がある。

永遠に渴している目には、四本の箸の悲しい競争を見る程の余裕がなかった。

女は最初自分の箸を割って、盃洗《はいせん》の中の猪口《ちょく》を挟んで男に遣った。箸はそのまま膳の
縁に寄せ掛けてある。永遠に渴している目には、またこの箸を顧みる程の余裕がない。

娘は驚きの目をいつまで男の顔に注いでいても、食べるとは云って貰《もら》われない。もう好い頃だと思っ
て箸を出すと、その度毎に「そりゃあ煮えていねえ」を繰り返される。

驚の目には怨も怒もない。しかし卵から出たばかりの雛《ひな》に穀物を啄《ついば》ませ、胎を離れたばかり
の赤ん坊を何にでも吸い附かせる生活の本能は、驚の目の主《ぬし》にも動く。娘は箸を鍋から引かなくなっ
た。

男のすばしこい箸が肉の一切れを口に運ぶ隙《すき》に、娘の箸は突然手近い肉の一切れを挟んで口に入れた
。もうどの肉も好く煮えているのである。

少し煮え過ぎている位である。

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一人娘の顔をちょいと見た。叱《しか》りはしないのである。
ただこれからは男のすばしこい箸が一層すばしこくなる。代りの生《なま》を鍋に運ぶ。運んでは反す。反しては食う。

しかし娘も黙って箸を動かす。驚の目は、ある目的に向って動く活動の目になって、それが暫らくも鍋を離れない。

大きな肉の切れは得られないでも、小さい切れは得られる。好く煮えたのは得られないでも、生煮えなのは得られる。肉は得られないでも、葱は得られる。

浅草公園に何とかいう、動物をいろいろ見せる処がある。名高い狒々《ひひ》のいた近辺に、母と子との猿を一しょに入れてある檻《おり》があって、その前には例の輪切《わぎり》にした薩摩《さつまいも》芋が置いてある。見物がその芋を竿《さお》の尖《さき》に突き刺して檻の格子の前に出すと、猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。芋が来れば、母の乳房を銜《ふく》んでいた子猿が、乳房を放して、珍らしい芋の方を取ろうとする。母猿もその芋を取ろうとする。子猿が母の腋《わき》を潜《くぐ》り、股《また》を潜り、背に乗り、頭に乗って取ろうとしても、芋は大抵母猿の手に落ちる。それでも四つに一つ、五つに一つは子猿の口にも入る。

母猿は争いはする。しかし芋がたまさか子猿の口に這入《はい》っても子猿を窘《いじ》めはしない。本能は存外醜悪でない。

箸のすばしこい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。

人は猿よりも進化している。
四本の箸は、すばしこくなっている男の手と、すばしこくならうとしている娘の手とに使役せられているのに、今二本の箸はどうとう動かずにしまった。

永遠に渴している目は、依然として男の顔に注がれている。世に苦味走ったという質《たち》の男の顔に注がれている。

一の本能は他の本能を犠牲にする。
こんな事は獣にもあろう。しかし獣よりは人に多いようである。
人は猿より進化している。

[# 地から 1 字上げ] (明治四十三年一月)

底本：「普請中 青年 森鷗外全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1995 (平成7) 年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年4月～9月刊

入力：鈴木修一

校正：松永正敏

2003年8月20日作成

2005年11月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。